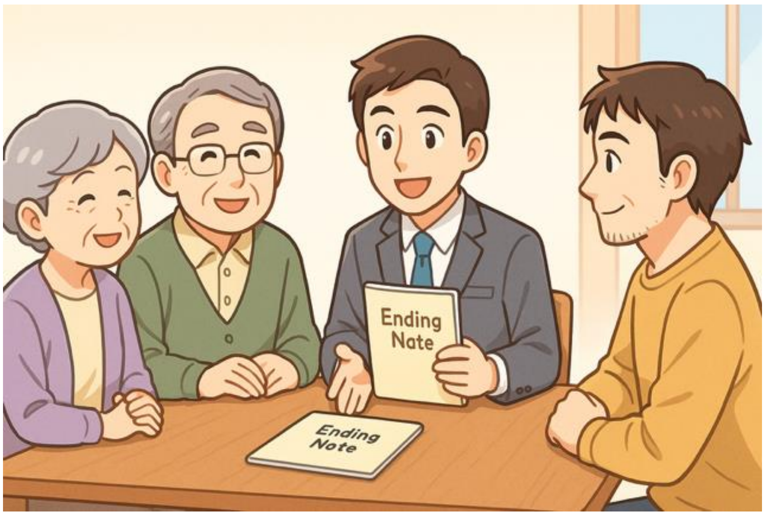
不動産のプロの私が自身の親の
介護・相続から学んだ
“本当に必要な相続準備”とは？



【全体最適で“幸せな相続”に導く、相続資産ナビゲーター】

アークコンサルティング合同会社　代表　麦嶋俊哉（むぎしまとしや）

（プロフィール）

1967 年、愛知県名古屋市生まれ。中学、高校を岐阜県多治見市で過ごし、1990 年に岐阜大学を卒業後、大阪の不動産開発会社に就職。会員制リゾートクラブの営業、外資系生保のライフカウンセラー、IT 系ベンチャー企業の取締役、不動産投資運用管理会社でアセットマネージャーなどの職を経て、現在は、大阪・梅田を拠点に不動産コンサルタントとして活動中。“超実践的コンサルティングで【負】動産を【富】動産に変える”を信条に、不動産や相続に関する問題で“不幸になる人”を一人でも減らすべく、日々取り組んでいる。

（保有資格）

公認 不動産コンサルティングマスター（相続対策専門士）／宅地建物取引士／賃貸不動産経営管理士／空き家相談士／高齢者住まいアドバイザー／上級定借アドバイザー

一般社団法人
ISCA 相続・事業承継コンサルティング協会

「本記事は、アークコンサルティング合同会社が一般社団法人相続・事業承継コンサルティング協会に寄稿したものであり、著作権はアークコンサルティング合同会社にあります。一切の要約・改変を禁じます。」

不動産のプロの私が自身の親の介護・相続から学んだ

“本当に必要な相続準備”とは？

1. “いつか”は、“いつのまにか”
私はこれまで、不動産や相続に関する数多くの相談に携わってきました。
しかし、実際に自らの家族の介護や看取り、相続に向き合ったことで、準備の難しさと大切さを、身をもって実感することとなりました。
介護（認知症）と相続、それは誰にとっても避けて通れない現実であり、
“いつか”は“いつのまにか”静かにやってくるのです。

2. 父の認知症と老老介護の限界
父が 75 歳の頃、帰省した私に母がこう言いました。
「お父さんが買い物に行った帰りに駐車場で縁石に乗り上げて、車を傷つけちゃって・・・」
慎重だった父には珍しい出来事で、私は違和感を覚えました。
その違和感は的中し、父はその頃から認知症の初期症状を見せていたのです。
やがて認知症が進行し、さらに軽度の脳梗塞も発症。
左手の痙縮により、トイレや食事にも介助が必要になりました。
母は「私が面倒を見るから」と、週 1、2 回のデイサービスを利用しながらの在宅介護を続けていましたが、夜中に起きた父が玄関の段差で転倒、顔面を強打して額から血を流す父を母ひとりでは起こすことができず、救急車を呼ぶことが何度もありました。
やがて母は限界を口にするようになりました。

3. 父の施設入所と母の寂しさ
私は、反対する母を何とか説得し、近所の認知症対応型グループホームに父を入所させました。母も「ここなら歩いても通えるね」と納得してくれましたが、その直後に新型コロナが流行し、施設は面会全面禁止に。
「お父さんに会えないのが一番つらい」と話す母の声は、日に日に元気をなくしていきました。私もできるだけ連絡を取りましたが、ある日、母に言われました。
「あなたは、長男だから、いずれこっちに戻ってくるのでしょう？」
「いや、俺は大阪で家庭を築いて、マンションも買ったし、仕事もある。戻るつもりはないよ」そう正直に答えた時、母が見せた寂しそうな表情は、今でも心に深く残っています。

4. 愛犬小太郎と父の死、そして母の異変
2020 年 10 月 5 日、実家で 16 年を共にした愛犬の小太郎が天寿を全うしました。
家族同然だった小太郎の死を境に、母の様子に変化が表れました。

その後、父がグループホームで肺炎を患い入院。
食事もとれなくなり、同年 12 月 17 日に帰らぬ人となりました。
父の葬儀を終え、実家に独り残された母は、ATM で何度も同じ金額を引き出したり、「暗証番号を入れても、お金が出ない」と私に電話してきたり、最も驚いたのは、買い物の帰りに道に迷って高速道路の入口に歩いて入ってしまい、警察に保護されたことでした。
その後、かかりつけ医の診断で「脳に気になる影がある」と言われ、市民病院での精密検査を予約しました。
しかし、私は直前に新型コロナに感染してしまい、検査は延期に。
その数日後、母は自宅の浴室で倒れているところを発見されました。
それは、父の四十九日を迎えたまさにその朝のことでした。

5. 死後の手続きと心の負担
父の葬儀の後、母を伴って市役所や年金事務所、銀行と必要な手続きをこなしていきました。
それらがようやく落ち着いた四十九日の朝、母の死に直面し、今度は母の死後の手続きを行うことになりました。
両親が亡くなる前後の 1 年間、私はほぼ毎週、大阪から実家まで片道 3 時間をかけて通い、通院介助、介護申請や実家の整理、そして葬儀や死後の手続きを行っていました。
体力的にも精神的にも限界に近い日々でしたが、「自分が長男だからやるしかない」その想いだけで動いていました。

6. 家じまいとお墓探し
空き家となった実家の今後について、私はリフォームして貸家にしたいと考えていましたが、弟は「思い入れもないし、管理もできない」と反対。
話し合いの末、売却を決めました。
お墓も、生前の両親の意向がはっきりしなかったため、弟と相談し、幼少期の思い出の地である名古屋・平和公園内の霊園で樹木葬にすることにしました。
「ここなら、きっと落ち着けるよね」と弟と語り合ったのを覚えています。

7. “住まいのエンディングノート”と“家族会議”のすすめ
この経験から、私は『住まいのエンディングノート』（国土交通省・日本司法書士会連合会などが作成）の重要性を強く感じるようになりました。
家の処分、譲渡、供養の希望、そして家族へのメッセージを形に残しておくこと。
これは、残された家族が悩まずにすむ“心の支え”になります。
そしてもう一つ、私が心からおすすめしたいのが“家族会議”です。
家族全員が元気なうちに、一度しっかりと本音で話し合う場を持つこと。
終活・相続対策は、先延ばしにすればするほど難しくなります。
「誰に何を残したいのか」「実家はどうするのか」を親子で話しておけば、“争族”はかなり避けられます。

8. 思いやりをカタチに
相続とは単なる財産の分け合いではなく、“家族の絆をつなぐ営み”です。
「もっと早く話しておけばよかった」という後悔は、誰の心にも深く残ります。
だからこそ、元気なうちに、“家族会議”を開いて、“住まいのエンディングノート”を親子で一緒に作ることを私は強くおすすめします。
それは“備え”ではなく、“思いやり”を形にする行動です。
誰かの人生を家族で心をひとつにして見送る。
それが、私たちにできる最大の優しさなのだと思います。
そして、その優しさをカタチにするお手伝いを、私たち、ISCA の相続資産ナビゲーターが担えるとすれば、これ以上の喜びはありません。

執筆者：

アークコンサルティング合同会社　代表　麦嶋俊哉（むぎしまとしや）

（プロフィール）
1967 年、愛知県名古屋市生まれ。中学、高校を岐阜県多治見市で過ごし、1990 年に岐阜大学を卒業後、大阪の不動産開発会社に就職。会員制リゾートクラブの営業、外資系生保のライフカウンセラー、IT 系ベンチャー企業の取締役、不動産投資運用管理会社でアセットマネージャーなどの職を経て、現在は、大阪・梅田を拠点に不動産コンサルタントとして活動中。“超実践的コンサルティングで【負】動産を【富】動産に変える”を信条に、不動産や相続に関する問題で“不幸になる人”を一人でも減らすべく、日々取り組んでいる。
（保有資格）
公認 不動産コンサルティングマスター（相続対策専門士）／宅地建物取引士／賃貸不動産経営管理士／空き家相談士／高齢者住まいアドバイザー／上級定借アドバイザー

※本コラムは、2025 年 7 月時点の法令等に基づいて執筆しています